

機関番号：32647

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530748

研究課題名（和文） 戦後日本における保育者のライフヒストリーに関する研究

研究課題名（英文） RESEARCH ON LIFE HISTORIES OF NURSERY TEACHERS IN POSTWAR JAPAN

研究代表者

岩崎 美智子（IWASAKI MICHIKO）

東京家政大学・家政学部・准教授

研究者番号：90335828

研究成果の概要（和文）：

本研究では、方法としてのライフヒストリーを検討した後、戦後の保育所における保育内容や「ララ物資」などの救援物資、保育者養成の実態を文献・資料等によって明らかにした。さらに、全国17都道府県において元保育者への詳細なインタビュー調査を実施して、職業選択の要因、「生きがい」の構成要素、人生の転機や挫折・困難の経験について分析をおこなった。また保育者が考える専門性や保育者にとっての「戦争」の意味を考察した。

研究成果の概要（英文）：

This research used the method of studying life histories and then documents and materials, to clarify the contents of child care and education in postwar day-care centers, postwar aid to Japan such as “LARA”, and the actual situation of development of nursery teachers. A detailed interview survey of former nursery teachers in 17 provinces throughout Japan was also performed, with analysis of the factors in choosing their occupation, elements comprising “life worth living”, and experiences of life turning points, setbacks and troubles. It also considers expertise of nursery teachers and the significance of “war” for nursery teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：福祉社会学、教育社会学、児童福祉学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：保育者、ライフヒストリー、戦後日本、職業、生活

1. 研究開始当初の背景

戦後60年を経て、日本社会の状況は様変わりし、女性のライフコースや職業観も大きく変化した。子どもたちの生活も、遊びや友だち、おとなとの関わりについても不変の部分とともに

大きくその様相を変えたものもある。教師研究が教えるのは、教師の教育観や実践に強い影響を与える生活やライフスタイルを研究することの重要性である。教師のライフコース研究やライフヒストリー研究はいくつかの蓄積があるが、

保育者のライフヒストリーに迫った研究はほとんどなされていないといっよい。

往年の保育者たちの歩みを丹念に聞き取って分析することは、女性たちが激動の戦後日本を職業人としてどのように生きてきたかを示す貴重な資料であり、保育学や教育学、社会学各分野における教師研究やライフコース研究の素材となりえる可能性を持っている。このように考えて、研究に着手した。

2. 研究の目的

戦後日本における保育者の生活と経験について、元保育者だった女性自身の語りをとおして描き出し、保育者という職業によってひとはどのように変化・成長していくのか、特に他者との関わりに焦点をあてて考察することである。

(1) 女性職業人のキャリア形成という観点から、ひとりひとりの成長・発達過程を把握する。対象者が保育者をめざした契機から退職に至るまでの過程を聞き取ることによって、保育者自身の意識の変容や出会い・挫折経験によって職業人として成長するプロセスを描き出す。

(2) 対象者たちの職業人としての時間は、日本の戦後史とクロスするものである。長期にわたる職業生活を送ってきた彼女たちの、敗戦から高度経済成長期、低成長期、バブル期以降という社会変動のうねりのなかでの歩みをたどる。保育という営みは、子どもの「生活」を保障するものなので、おのずとそれらの社会的特徴や時代による変遷が明らかになる。保育者の生活や志向、価値が子どもたちにどのように伝えられたかその一端を垣間見ることができると予想する。可能ならばケアと成熟との関連について考察する。

3. 研究の方法

(1) 1年目は、ライフコースや生涯発達の先行研究や戦中・戦後の保育所・幼稚園の状況な

どの歴史的資料を整理したうえで、対象者たちが活躍した当時の時代背景や社会的な出来事を確認した。そして、調査対象地域の概要や特色を調べた後、インタビュー調査に臨むことにした。

(2) 調査実施にあたっては、調査マニュアルを作成して、研究目的や方法について研究者相互の合意形成を図り対象者の人権保護や倫理的配慮に努めた。また、てがかりとなる10の質問項目を用意したが、なるべく対象者に自由に語ってもらうような半構造化インタビューをめざした。

(3) 2年目は、ほぼ毎月1回ずつ研究会を開催して、メンバー各自の研究テーマにそった内容を発表、議論を重ねた。合わせて、1年目に収集した保育者の語りをもとに、様式を統一し、30人分のケース記録をまとめた「事例集」(全422頁)を刊行し、調査対象者や調査協力者(紹介者)に配布した。

(4) 3年目もひきつづき、定期的な研究会を開催して、プロジェクトメンバーが交代で発表をおこない、それらをもとに学会発表や論文執筆をした。年度末には、3年間の研究成果をまとめた報告書を作成した。

4. 研究成果

(1) 方法論の検討

インタビュー研究の方法論としてしばしば混同されるライフヒストリーとライフストーリーについて、桜井厚の議論を手がかりにその違いについて検討した。

その結果、これらの2つには必ずしも方法論上の明確な区別があるわけではなく、語り手の“語り”に対するそれぞれの認識にもとづく立場を示すひとつの指標として、ライフヒストリーあるいはライフストーリーという言葉の使い方の違いが生じていることが理解された。

(2) 戦後混乱期の保育者養成

戦後児童福祉法の制定により保育所は児童福祉施設と位置づけられ、これまで定められていなかった保母の資格が設けられた。1945年から1950年の戦後混乱期の保育者養成について概観した。

まず、保母資格認定講習会と保母試験の目的については、①保母不足を補うための有資格保母の確保、②これまで働いていた無資格保母の早急な資格取得、の2つで、当時は暫定的な取り組みと考えられていたことが理解できた。

次に、保母試験の果たした役割として、元保育者への聞き取り調査の結果から、79.3%の保育者は保母認定講習会の受講や保母試験を受験して資格を取得していることが明らかになった。つまり、当時の最も標準的な保母資格の取得方法は、保母試験によるもので年に1度各都道府県で実施される保母試験は、資格取得に有効な方法であり、その果たした役割の大きさが示された。

また、戦後の混乱した時期に保母試験の実技を含む試験科目と保母資格認定講習会の多岐におよぶ講習内容が求められた背景について、以下に示す3点が明らかになった。1つ目は、従来の保育所保母養成は、幼稚園保母の養成に便乗する形で行われていたが児童福祉法制定により新しい保母制度の出発に相応する独自の方法が求められ、保母養成所の修業科目に準拠した形で定められたということである。2つ目として、保母養成にかかわる学識者や児童局担当者から、質の高い保育者の養成を求める提言がなされていたということが考えられる。3つ目は、戦前の救貧施設としての託児所のイメージから、新しい児童福祉の理念を導入し設置された児童福祉施設としての保育所という認識の転換を図るためには、児童福祉法に基づきその理念を実現していくことのできる資質と能力を持った専門職としての保母の教育が必要と考えられたの

であった。

(3) 保育者たちの職業選択

往年の保育実践者の「語り」から、ひとりの女性が激動の戦後において、どのように「保育者」という職業を選択したのか、時代背景を含めながら考察した。その結果、職業決定の時期は学歴により異なるが、高等女学校、高等女学校専攻科、女子専門学校、高校（戦後）のいずれかの卒業に際しての決定（16歳から19歳）が一般的であった。しかし、人生最初の職業選択で保育者を選んだ者より、卒業後すぐは保育以外の職業に就き、後に保育者の道へと進んだ者のほうが多いということが明らかになった。また、保育者になった理由の分類を試みると、①「消極的職業選択」②「現実を受け止め生きていくための職業選択」③「必然の職業選択」④「他者の勧めによる職業選択」⑤「自己の意志による職業選択」の5つに分類することができた。いずれの理由にしても、なんらかの戦争による影響を受けていることが特徴としてあげられた。

戦後の混乱期においては、女性が自由に職業を選択するという意識はあまりなく、また自由に選べる状況ではなかったともいえよう。しかし、元保育者たちは、職業選択時には積極的選択理由ではなかったものの、その後の保育者人生において仕事に楽しさと生きがいを見出し、情熱を持って保育に携り、自分自身で保育所を設立する者もみられた。この時代においては、職業選択時のモチベーションの高さと、その後の保育者という職業人生の充実度に相関はみられなかった。

(4) 戦後の保育所における保育内容：保育所保育指針発行以前に着目して

戦後から保育所保育指針発行に至る20年間について、保育所関連法規、児童福祉行政によ

る指導書や参考書を取り上げ、当時の保育所における保育内容について検討した。その結果、終戦直後から保育の基本原則を自由遊びとしていたことが明らかになった。また、当時の社会状況下では、保育所には養護的側面が多く比重を占めていたこと、さらには家庭指導が保育内容のひとつとして位置づけられていたことが明らかになった。

(5) 「ララ」の記憶

戦後の一定期間保育所に支給された脱脂粉乳に代表される救援物資について、当時の社会状況と児童福祉政策を検討しながら、資料や人びとの語りをまじえて考察した。

戦後の食糧不足に対して、保育所では 1949 年 5 月に「保育所給食実施要綱」が出され、給食が実施されるようになった。その食材のかなりの部分は救援物資の提供を受けていた。海外からの救援物資としては、ララ物資、ユニセフ物資、アメリカ政府の救援物資、ケア物資などがあるが、なかでもララ物資は、戦後の保育所を知る人びとの語りによく登場するほどなじみのあるものであった。

「ララ」は、総受領金額（見積もり、換算）はユニセフ物資より少なかったものの、関わった団体数や人員などの規模、受領した団体数や人員数などの規模では他の救援物資をはるかにしのいでいる。1946 年 11 月からおよそ 5 年半にわたって、おもに 13 歳以下の子どもがいる児童福祉施設に、食糧や衣料などが分配・配給された。当時極端に不足していた子どもの成長に欠かせない食糧を供給したという点で、子どもたちの生存を保障したといえる。

(6) 保育者の生きがい

敗戦後まもなく保育者となった女性たちの約 7 割は、積極的とはいえない選択理由で保育者の道に進んでいる。しかし、その後の人生にお

いて 50 年以上も辞めることなく働いて園長職に就いた人や、自分で保育所を設立する人までみられた。50 年以上もの長きにわたり働き続けることができたひとつの要因として、保育者という職業人としての生きがいに注目し、その特徴を把握し考察した。その結果、保育者としての生きがいの構成要素として、①人とのつながり、②未来とのつながり、③他者からの評価と感謝、④自分自身の成長、⑤子どもの傍らに居ること、の 5 つが見出された。

戦後の女性の就労率は、男性に比べて半数以下と低く、職業選択の幅は広くはなかった。そのような時代に、きっかけはさまざまであっても保育者となって一所懸命与えられた仕事に取り組み経験を重ねていくなかで、生きがいを見出していたことが明らかになった。また、保育者の生きがいの特徴としてその中身をみてゆくと、すべて「人と人のかかわり・つながり」のなかから見出されたものであるということが理解できた。

(7) 保育者の挫折と困難

元保育者たちが直面した挫折や困難が、①人間関係、②能力・専門性不足、③社会変動に伴う困難、④低待遇、⑤家庭（子育て）との両立の 5 種類であり、人とのつながりを生きがいにしているにもかかわらず、それらが阻害されたりかなわなかった場合にもたらされたものであることを明らかにした。

さらに、元保育者たちの人生の転機になった出来事は、敗戦や外地からの引き揚げなど生活の激変、配偶者の死や離別、昇進など職業上の新たな体験であることが理解された。そして、それらつらい出来事や苦しい時代を支えてくれたのが、保育者仲間や保護者たち、上司、家族、友だち、関連機関、子ども（園児）たちであったことを語りによって詳述した。

(8) 保育者の専門性

調査対象者によるインタビューデータをもとに、全国保育士会が作成した「研修体系」を参考にしながら考察を加えた。その結果、保育士の専門性の基盤として、愛情、観察力、創造力を答えた回答が多かった。また、専門性としては、ひとりひとりの子どもの発達保障、社会の動向や変化を知ることなどがインタビュー結果から導き出された。

(9) 保育者にとっての戦争

対象者のうち比較的年齢が高い 1920 年から 1931 年の間に生まれた 4 人を対象に、保育者にとっての「戦争」の意味を考察した。

戦争という社会変動によって、平穏な学生生活と家族との暮らし、子どもたちと過ごす保育所での生活、よりどころとしていた保育の価値が破壊され、彼女たちが持っていた他者への共感や生きる意欲もいつとき失われた。さらに、自分が保育していた幼い子どもの一家全員の死亡や自分自身の肉親の死にも遭遇した。

ある人は、幼稚園や保育園の設立に奔走し職務に邁進することによって使命を果たし、またある人は真に子どものためになる保育＝意義のある仕事を続けることによって「生存者」として生きぬいた。子どもたちと過ごす日々によって戦中・戦後の悪夢から徐々に日常へと帰還した沖縄の保育者や、自身の子どもの時代の体験にもとづいて生命の尊重を保育理念とするに至った外地からの引き揚げ経験を持つ保育者がいた。

どれもが重い「喪失」の体験ではあるが、大切なものを戦争によって失った女性たちは、戦後保育者として生きることによって再生を果たしたといえるだろう。

(10) 本研究の貢献と今後の展望

本研究は、元保育者たちに詳細なインタビューを実施し、それらのケース記録や文献・資料

をもとに多角的な考察をおこなった。やや地域的な偏りはあるものの、ほぼ満遍なく日本全国を網羅している。また、戦中や敗戦直後の保育所や保育、子どもたちの様子を語れる保育者の数は年々限られてきており、そのような意味においても画期的な研究成果であるといえる。

いっぽうの課題としては、今回ふれられていない保育者の保育観や子ども観の考察をすることや、職業上の困難や危機、生きがい、専門性等に対する考察をさらに深めていく必要があるだろう。それらをふまえたうえで、ケアすることによる保育者の成長、あるいは成熟についての検討も課題として残された。今後は、これらを重点的に研究していくつもりである。

研究成果の一部を OMEP 世界大会でポスター発表した際に、ヨーロッパやアジアの研究者・実践者たちから多くの関心が寄せられた。今後は、可能ならば外国の保育者を対象とする比較研究を試みたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

①岩崎美智子、保育者の挫折と困難、保育者のライフヒストリーに関する研究、査読無、2011、82-92

②富田喜代子、保育者の専門性、保育者のライフヒストリーに関する研究、査読無、2011、93-110

③亀崎美沙子、戦後の保育所における保育内容—保育所保育指針発行以前に着目して—、東京家政大学博物館紀要、査読無、第 16 集、2011、27-43

④松本なるみ、保育者の生きがい—戦後を生きた元保育者のインタビューの考察から—、文京学院大学人間学部研究紀要、査読無、第 12 巻、2010、177-187

⑤亀崎美紗子、ライフヒストリーとライフストーリーの相違—桜井厚の議論を手がかりに—、東京家政大学博物館紀要、査読無、第15集、2010、11-23

⑥岩崎美智子、保育者たちの「戦中」と「戦後」—一元保育者のライフヒストリーから—、東京家政大学研究紀要、査読無、第50集、2010、1-10

⑦松本なるみ、戦後草創期の保育所—一元保育所保母の語りをてがかりに—、文京学院大学人間学部研究紀要、査読無、第11巻第1号、2009、197-212

⑧岩崎美智子、「ララ」の記憶—戦後保育所に送られた救援物資と脱脂粉乳、東京家政大学博物館紀要、査読無、第14集、2009、19-32

⑨松本なるみ、戦後における「保育者」という職業選択—一元保育者の語りから—、宇都宮短期大学人間福祉学科研究紀要、査読無、第7号、2009、9-20

[学会発表] (計5件)

①岩崎美智子、保育者の挫折と困難—一元保育者のライフヒストリーからの考察—、日本乳幼児教育学会第20回大会、2010年10月24日、関西学院大学

②IWASAKI MICHIKO

Impacts of World War II on the Life Histories of Nursery Teachers Born in the 1920-30s, 26th OMEP World Congress Sweden 2010, Aug11-13 2010

University of Gothenburg Sweden

③MATSUMOTO NARUMI

Nursery Teachers Job Selection and Satisfaction in the Twenty Years Following World War II

26th OMEP World Congress Sweden 2010

Aug11-13 2010, University of Gothenburg Sweden

④松本なるみ、戦後混乱期の保育者養成、日本乳幼児教育学会第19回大会、2009年11月15日、川村学園女子大学

⑤岩崎美智子、松本なるみ、女性たちの職業選択—一元保育者の語りから—、日本保育学会第62回大会、2009年5月17日、千葉大学

[図書] (計2件)

① 岩崎美智子編著、科学研究費補助金による印刷、保育者のライフヒストリーに関する研究、2011、125頁

② 岩崎美智子、松本なるみ、富田喜代子、亀崎美紗子、科学研究費補助金による印刷、保育者30人のライフヒストリー、2010、422頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩崎 美智子 (IWASAKI MICHIKO)
東京家政大学・家政学部・准教授
研究者番号：90335828

(2) 連携研究者

富田 喜代子 (TOMIDA KIYOKO)
四国大学・生活科学部・准教授
研究者番号：70441582
松本 なるみ (MATSUMOTO NARUMI)
文京学院大学・人間学部・助教
研究者番号：70442027

(3) 研究協力者

亀崎 美紗子 (KAMEZAKI MISAKO)
東京家政大学・家政学部・助教
研究者番号：60459592